

例 言

1. 本書は、埼玉県入間郡大井町の個人住宅建設などの小規模開発に伴う、記録保存のための町内遺跡発掘調査報告書である。
2. 発掘調査および整理作業は、国（1,990,000円）、県（995,000円）の補助金を受け、平成4年4月9日から平成5年3月31日まで実施した。
3. 調査組織
 調査主体者 大井町教育委員会
 教 育 長 小林茂吉
 社会教育課長 吉田和子 文化財保護係長 岩崎保夫
 文化財保護係・発掘調査担当者 坪田幹男・高崎直成・鍋島直久
4. 本書作成にあたっての作業分担は次のとおりである。（順不同）
 執筆は坪田幹男、鍋島直久があたり、それぞれ文末に記した。
 土器復元・拓影：中田藤子、中野和子、丹治つや子、遺物実測：鍋島直久、高橋けい子、石垣ゆき子、斎藤尽志、トレース：小林登喜枝、須藤さち子、図版作成：柚木嘉図子、遺構写真：坪田幹男、鍋島直久、遺物写真：荻原明、鍋島直久、また、本書の編集・挿図の作成については今井堯氏の絶大な援助と協力を得た。
5. 各遺跡の調査から報告書刊行にいたるまで下記の諸氏、機関より御指導、ご協力を賜った。
 浅野晴樹、荒井幹夫、有山隆造、今井堯、内田賢司、加藤秀之、神木繁嘉、駒井和久、桜井信枝、佐藤正志、笹森健一、島田一郎、田代治、谷井彪、中島宏、塚田政子、原口雅樹、早坂廣人、松本新八郎、松本富雄、三上七五郎、柳井章宏、柳沢健司、和田晋治（敬称略）埼玉県教育局指導部文化財保護課、大井町大井・苗間第一土地区画整理組合、亀久保特定土地区画整理組合、大井町立郷土資料館、大井町遺跡調査会。
6. 発掘調査ならびに整理作業参加者は下記の皆様である。明記して謝意を表したい。
 〈発掘調査参加者〉（敬称略）
 会沢泉、新井和枝、荒井美奈子、飯塚泰子、石川八重子、井上晴江、内田信治、海老原サナエ、大井美智子、大曾根キク子、遠田つる、笠原英子、片岡ミヤ子、金子君子、神木光治、小林こずい、小山エミ子、斎藤尽志、佐久間ひろ子、佐藤智子、鈴木英子、鈴木エミ子、鈴木健蔵、関田成美、高木千恵子、高橋明美、戸澤竹二、中嶋末子、仲里しげ子、並木宗次、野岡由紀子、野沢松代、羽柴理恵、林きぬ子、比嘉洋子、細谷清作、三村美代子、森脇やよい、ハッ井幸子、山形幸子、山下一枝、若尾久美子、若林紀美代。
 〈整理作業参加者〉（敬称略）
 石垣ゆき子、斎藤尽志、須藤さち子、柚木嘉図子、高橋けい子、丹治つや子、中田藤子、中野和子
 ※1989年から発掘調査に協力いただいた、遠田つるさんが3月急逝されました。生前のご協力に深く感謝し、ご冥福をお祈りいたします。

凡 例

1. 本書の図版の縮尺は、住居・土坑1/60、炉1/30、土器実測図1/4、土器拓影1/3とした。
2. 遺構図中の細数字は、床面もしくは確認面からの深さ（cm）を示す。
3. 胎土粒子に関する各項の基準は次のように定めた。
 小礫；2.0mm以上、粗砂；0.2～2mm、細砂0.2mm以下。
4. 土器図の断面図の表図は、「網目」が繊維含有、「黒丸」が雲母粒を含有する縄文土器を表わしている。

I 経緯

○ 調査に至る経緯

埼玉県大井町は、首都圏30km圏内の県西南部に位置する。かつては畑作を中心とする純農村地帯であったが、昭和40～50年代にかけて人口で約22,000人、6,000戸が急増した。面積8㎢で現在の人口は39,000人を超えている。昭和60年代以降は、大規模な土地区画整理事業が進められ、町内遺跡の約80%近くがその区域内に位置しているため、土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査が町遺跡調査会により通年実施されてきている。町では、国庫補助を受けて「町内東部遺跡群発掘調査事業」(昭和53年～平成元年)「町内遺跡(群)発掘調査事業」(平成2年～)として民間の小規模開発に対処するため、埋蔵文化財の調査を実施してきた。遺跡の調査は、庁内関係各課と連絡調整をして行ってきた。農業委員会事務局から農地転用許可申請段階、また、都市整備課から開発事前協議、建設課から建築確認等の申請段階でそれぞれチェックされ、教育委員会は遺跡地図と照合のうえ現地踏査を実施し、遺跡の状況を確認したうえ、遺跡に影響をおよぼすとみなされる工事主体者に連絡し、協議を行った。その結果、教育委員会が記録保存のための発掘調査を工事主体者から依頼され、教育委員会が発掘調査主体者となって調査を実施することになったものである。平成4年度の調査は、下記の16箇所であった。民間及び公共事業に伴う埋蔵文化財の試掘調査についても、国庫補助事業として対応した。

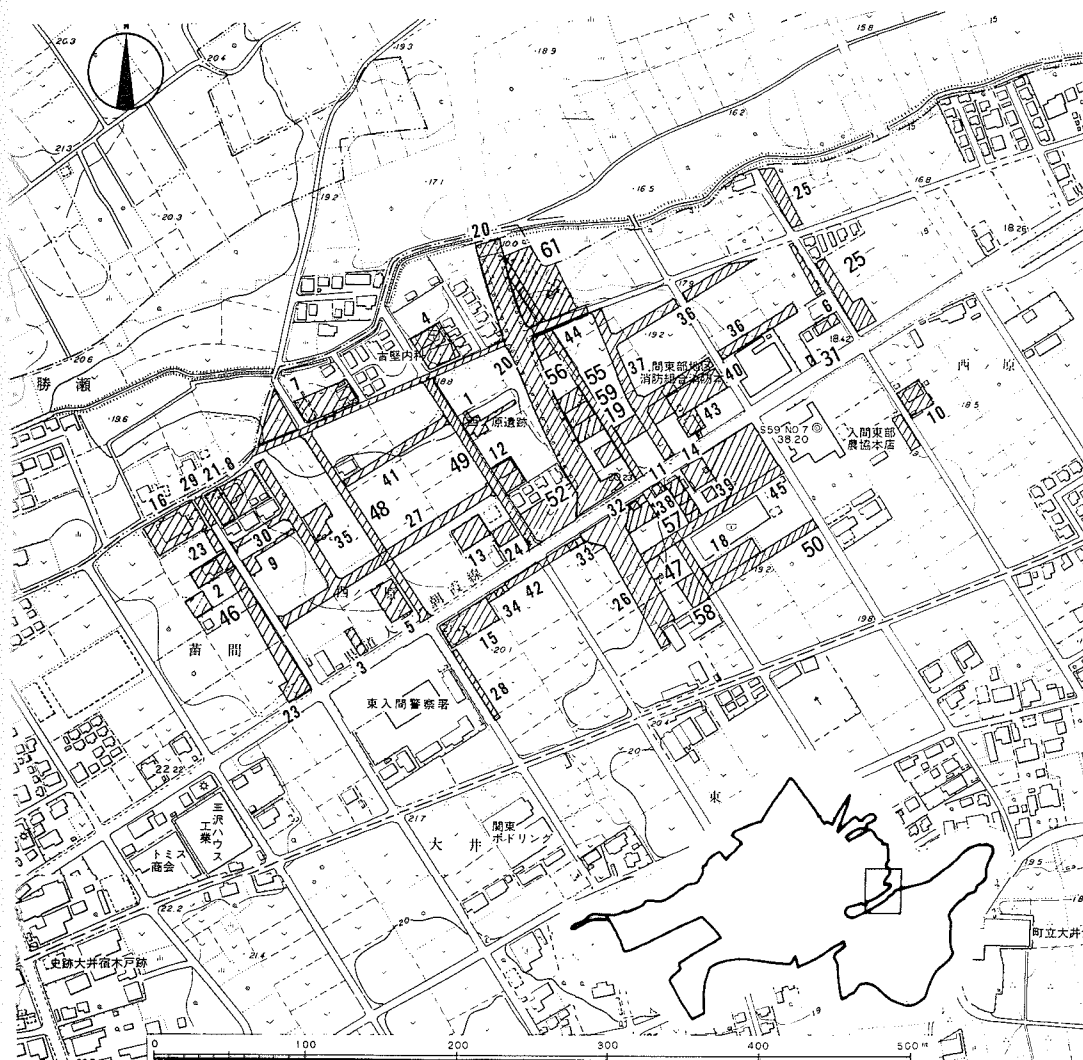
No	遺 跡 地 点 名	所 在 地	開発面積(㎡)	調査原因	調査期間
1	亀居遺跡第33地点	大井町亀久保1011-7	998	個人住宅建設	4/9～4/30
2	本村遺跡第25地点(試掘調査)	〃 大井107	370	倉庫建設	5/21、6/2
3	大井氏館跡遺跡第7地点	〃 大井241-1	157	個人住宅建設	6/3～6/17
4	苗間東久保遺跡第18地点(試掘調査)	〃 苗間字東久保639、640、641、464	906.84	分譲住宅建設	6/2～6/22
5	西ノ原遺跡第56地点	〃 苗間字西ノ原133-2	261.4	〃	6/23～6/26
6	西ノ原遺跡第57地点	〃 苗間字西ノ原143-3、143-4	174	個人住宅建設	7/6～9/1
7	浄禅寺遺跡第7地点(試掘調査)	〃 苗間字東久保573-4	831.15	共同住宅建設	7/4～7/17
9	西ノ原遺跡第58地点	〃 苗間字西ノ原137-2	146	個人住宅建設	9/8
10	中沢前遺跡3地点(試掘調査)	〃 苗間字西ノ原189-3	272	〃	10/1～10/2
11	西ノ原遺跡第59地点	〃 苗間字西ノ原135-1	494.9	〃	10/6～11/12
12	本村遺跡第26地点(試掘調査)	〃 大井348、369、370の一部	575.7	〃	10/4～10/6
13	本村遺跡第27地点(試掘調査)	〃 大井145	1,101	共同住宅建設	10/27
14	中沢前遺跡4地点(試掘調査)	〃 苗間字西ノ原201-2	168	個人住宅建設	11/13、11/20
15	西ノ原遺跡第60地点	〃 苗間字西ノ原136-2	253	〃 (曳家)	12/10～12/25
16	中沢前遺跡5地点(試掘調査)	〃 苗間字西ノ原184-1	732	駐車場造成	2/13～2/18

(坪田幹男)

Ⅲ 西ノ原遺跡

Ⅲ-1 遺跡の立地と環境 西ノ原遺跡は、入間川の支流新河岸川に注ぐさかい川の谷頭部から約500m程度下った右岸に位置する。さかい川は前章の亀居遺跡下を東流する福岡江川の南方約1kmを、新河岸川にむけてほぼ平行して流れる武蔵野台地特有の伏流水である。遺跡標高は18~21mで、現谷底との比高差は2~3mを測る程度で起伏の小さい低位台地上に立地する。

本遺跡の発掘調査率は町内遺跡群では突出しており、遺跡面積10haの約40%代が調査されてきている。過去22年間、60箇所にあぶ調査で明らかになった本遺跡の時期は、確認遺構から旧石器時代、縄文時代早期・中期・後期、中世、近世である。特に縄文時代中期にはメガネ状の環状集落が形成され中期全般を通した良好な大規模集落跡として町内屈指の遺跡に挙げられる。今年度は新たに4箇所、面積にして1,328㎡を調査し、早期の炉穴・中期の住居跡他を確認した。

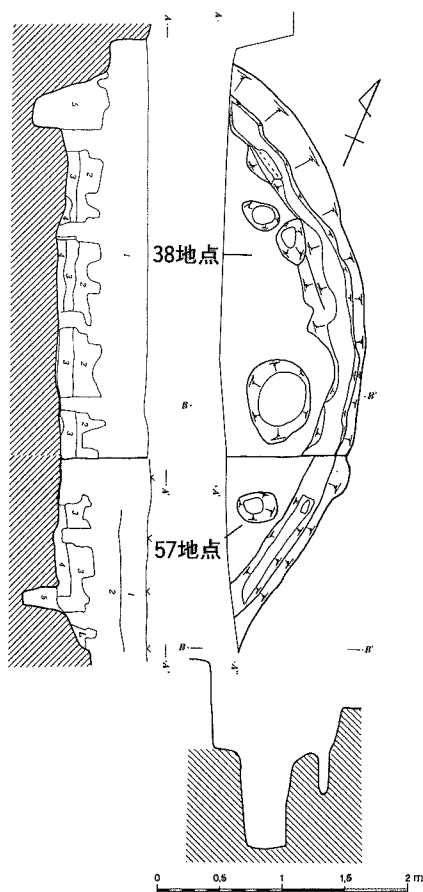


第17図 西ノ原遺跡の地形と調査区 (1/5000)

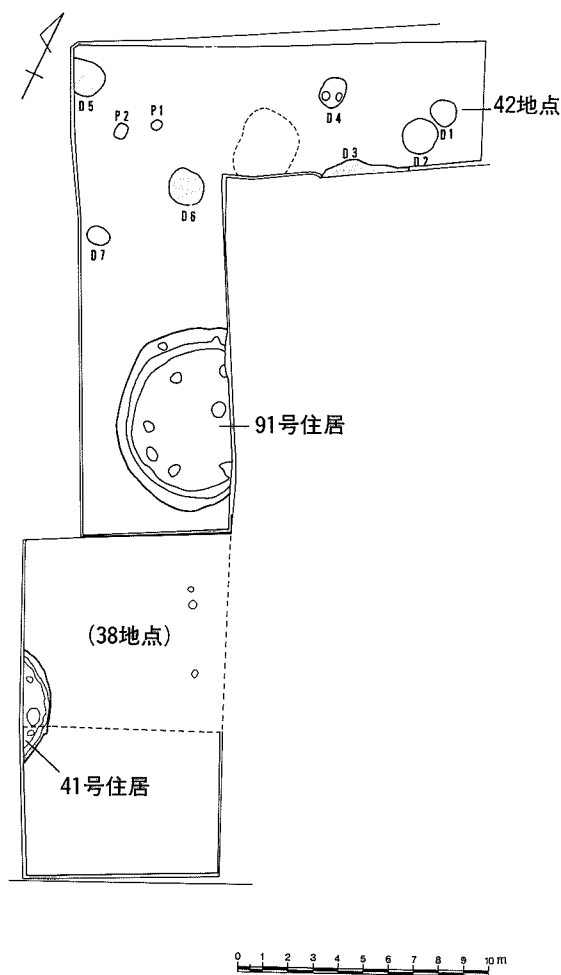
Ⅲ-3 西ノ原遺跡第57地点

Ⅲ-3-1 調査の概要

大井町大井・苗間第一土地区画整理事業の一環として県道大宮・朝霞線の拡幅計画に伴い、拡幅予定地の既存施設の移転の内、個人住宅移転に係る部分について国庫補助事業の対象調査として実施した。1992年度は本章掲載の56地点1件が該当した。調査は7月6日から県道拡幅部分と同時に着手した。また、1989年度に調査された第38地点を挟み南側部分も近い将来の開発に対処し、調査対象とした。



第23図 西ノ原遺跡41号住居跡 (1/60)

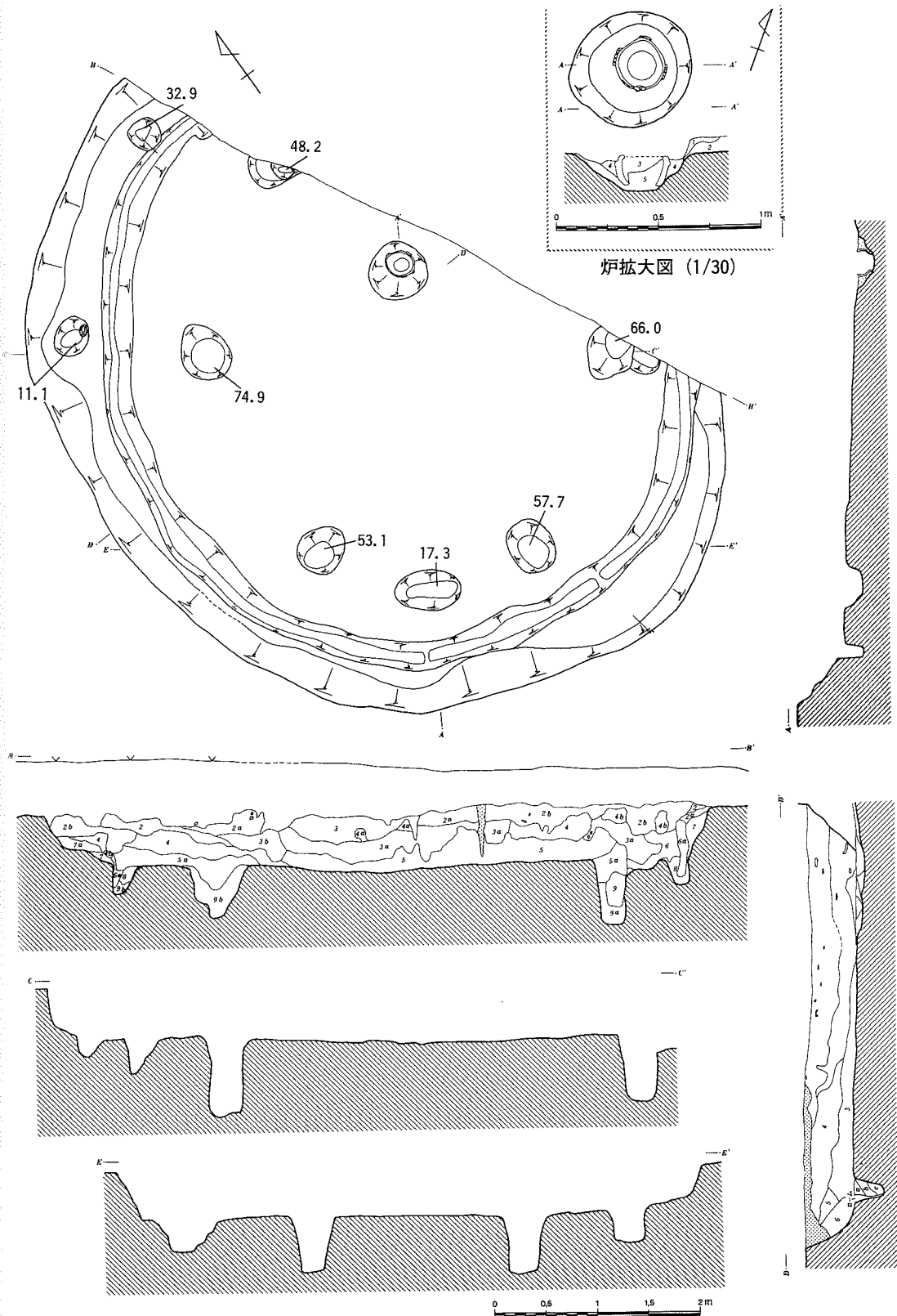


第22図 西ノ原遺跡第57地点遺構配置図 (1/300)

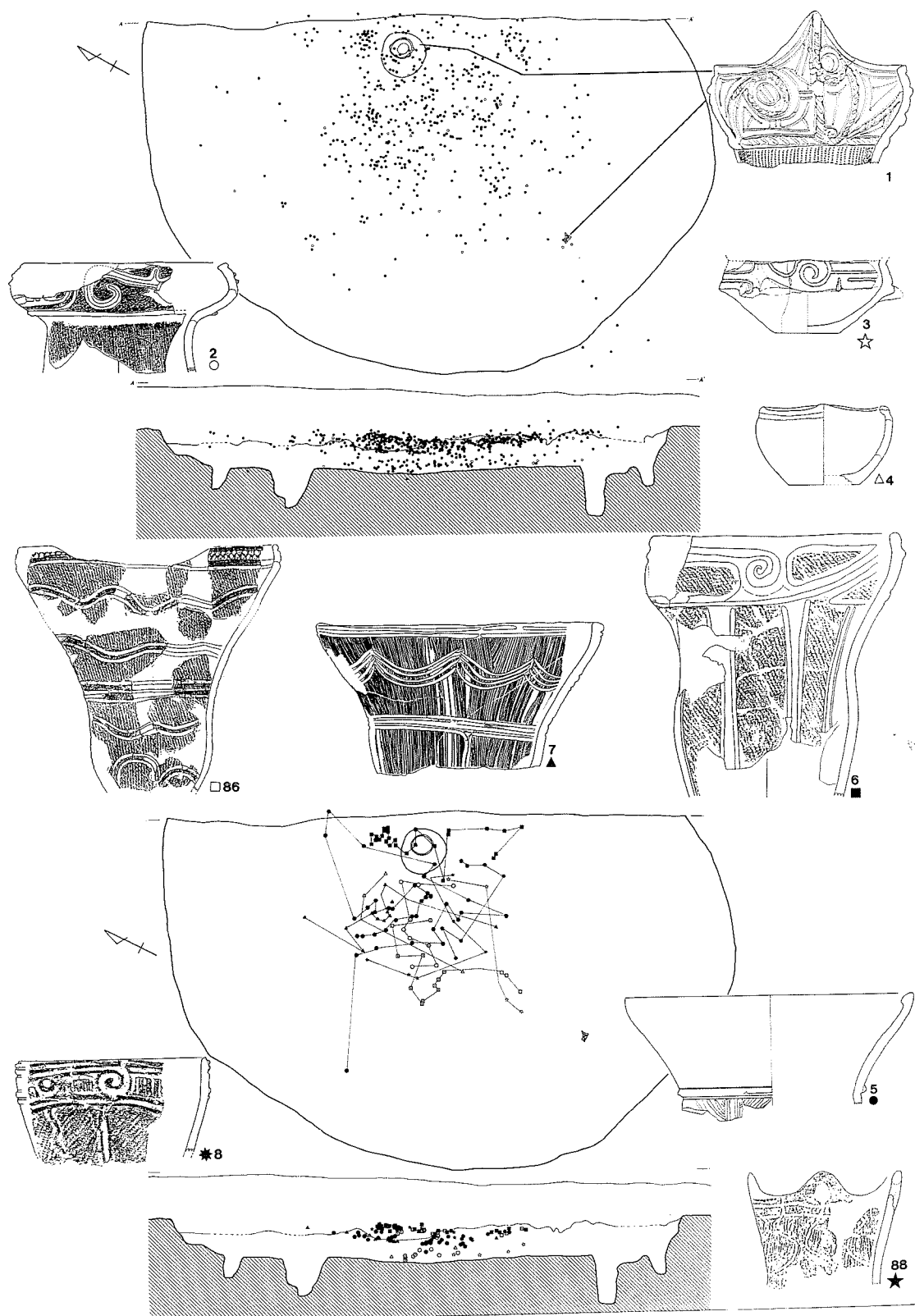
Ⅲ-3-2 遺構と遺物

A 41号住居跡 今回発掘したのは住居跡東南部のごく一部のみであり、1989年に調査した同住居の南に接する部分である。前回調査部分と併せて図示した。

(形状) 円形または楕円形を呈すると想定されるが、ほぼ垂直に立ち上がる壁と、やや深めの壁溝が確認部分では全周する。確認面から床の深さは約40cm。床面は踏み固められている。小ピット1を確認した。遺物は今回出土していないが、加曽利E I 新期。



第24図 西ノ原遺跡 91号住居跡 (1/60) ・同炉 (1/30)



第25図 西ノ原遺跡 91号住居跡遺物出土状況図 (1/4)

B 91号住居跡（第24・25図）

（位置） 調査区のほぼ中央部から、住居跡全体の約2/3を確認した。東側1/3が区域外にかかる。遺跡全体から俯瞰すれば、東側環状集落の南東部隅に位置し、比較的遺構群の切りあいの少ない部分である。確認標高は20.2m。主軸方向はN-31°-E。

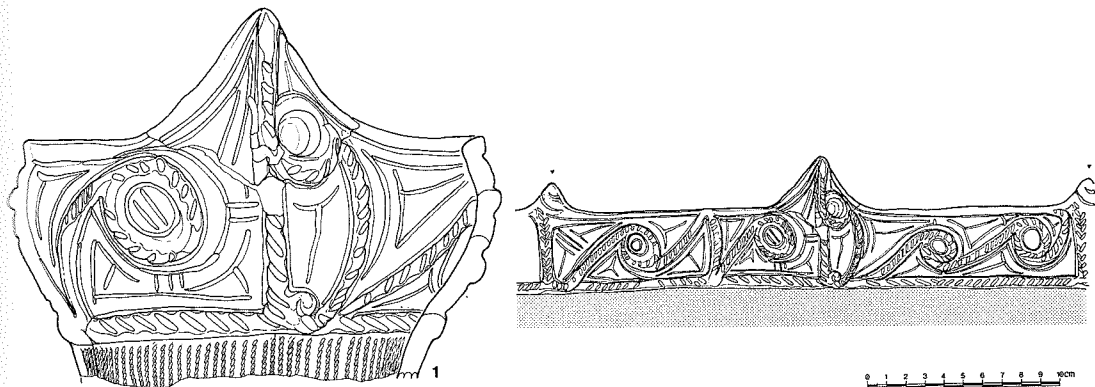
（形状） 平面形——楕円形。規模——推定長軸780cm、推定短軸680cm。壁高は東側55cm、南で38cm、西側45cm。壁は東側で急な傾斜をもち、西側は段をもって立ち上がる。床面——東西はほぼ水平であるが、南北では約10cmのレベル差があり出入口の南方が高い。炉の周囲は壁際と比較して10cm程度窪くなっている。床面中央部、炉跡の周囲は比較的踏み固められる。

（ピット） 主軸線（P 6と炉を結ぶ）上をはさんで左右対象の位置に2本ずつ配置され、主軸線上の出入口部際にP 6が、西北壁直下に2本が掘り込まれている。主柱穴は6本と思われるが北東部隅は区域外で確認されていない。主柱穴5本の平均深度は60.1cmでこれらの配置は六角形をなす。

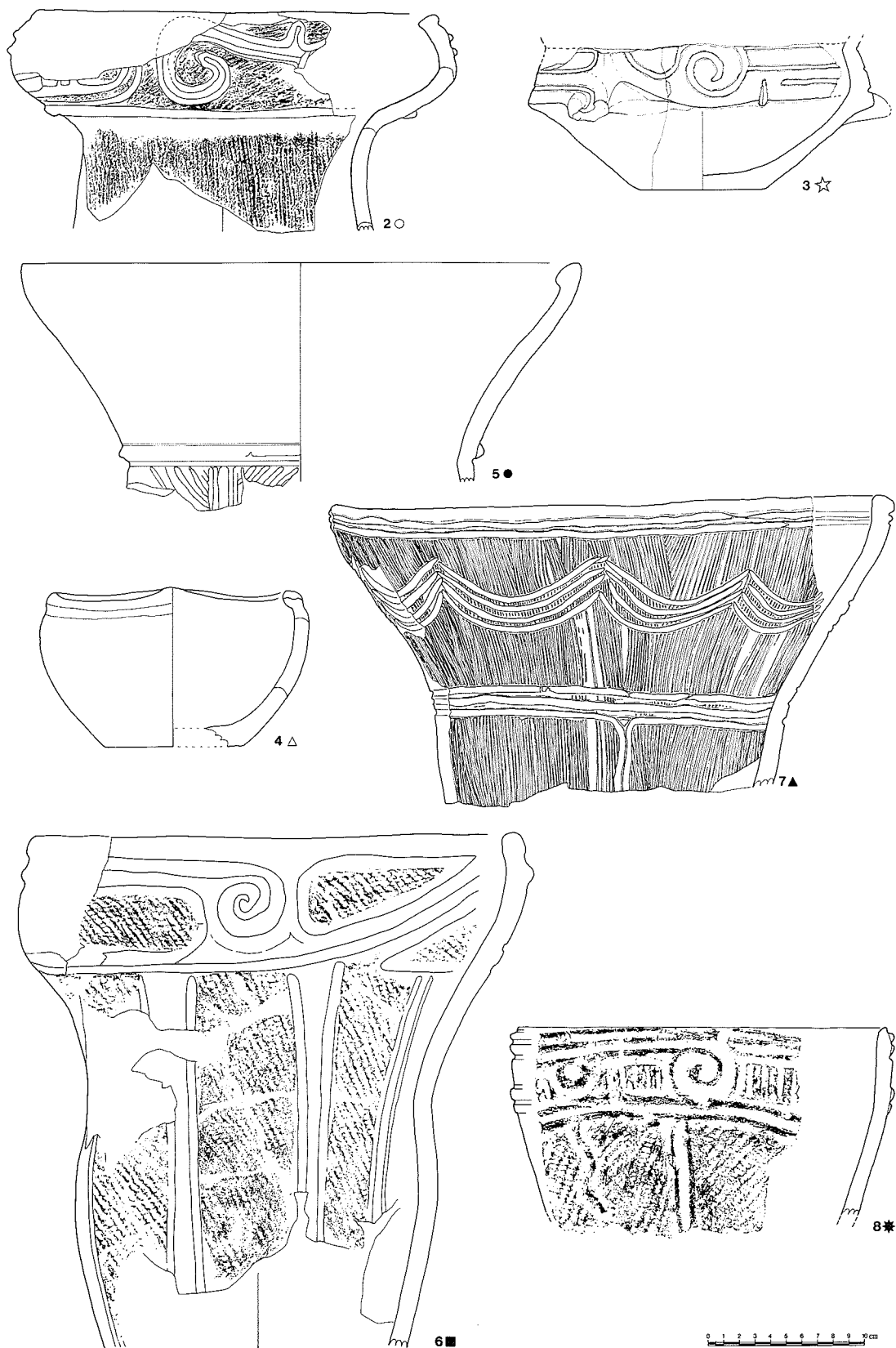
（炉） 長軸ライン上の中央より北へ寄った部分で埋設土器をもつ炉が確認された。長径60cm、短径55cmの円形埋甕炉で深さは-19cm。焼土は顕著ではないが認められる。埋設土器は炉のほぼ中心に正位に置かれている。

（遺物出土状態） 平面分布は住居中心部周囲に多く、壁際近くからはほとんど分布が認められない。垂直分布をみると遺物は床面直上で勝坂式土器が満遍無く分布し、覆土上層部に大量に加曽利EⅡ式土器が密度高く出土している。壁際から出土することはほとんどなく、遺物が三角堆積土形成後に廃棄されたものと判断される。

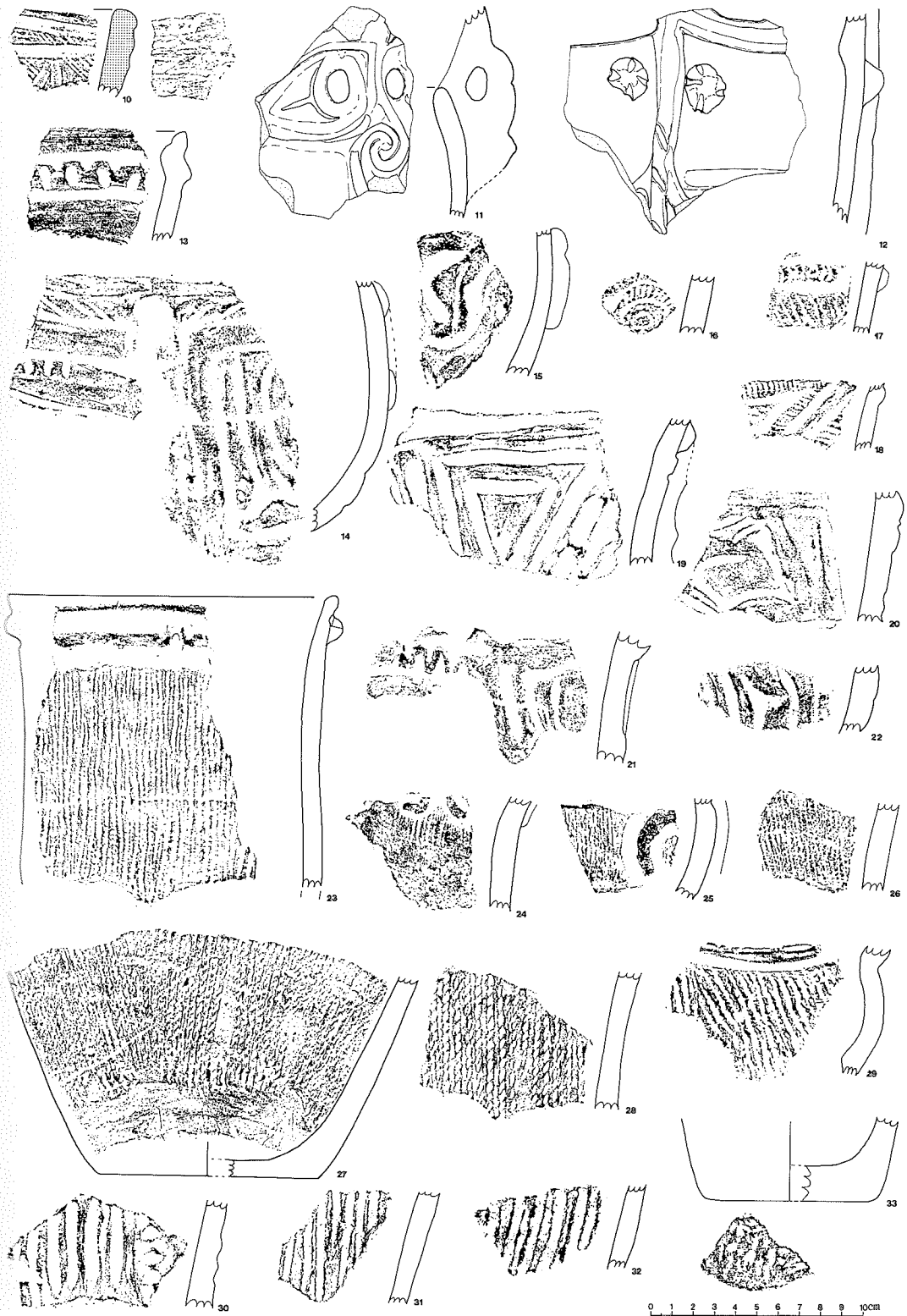
炉体土器（第26図） 口径24cmの頸部以下を欠く深鉢形土器。現存高は平縁な口縁部で13cm、大把手部で20cmを測る。口縁部は内湾し、平縁な口縁部に2ヶ所波状の把手が付けられ、大把手は炉内ではなく、南側の床面直上から出土している。口縁部文様は刻目のある太めの隆帯で渦巻文を連結し、隆帯による区画内は沈線で三叉文を施している。胴部との境界にも隆帯を横位に貼り付け、胴部地文には燃糸文を施文する。焼成良好。赤褐色を呈し、胎土に砂粒を含む。



第26図 西ノ原遺跡 91号住居跡 炉体土器1 (1/4)



第27図 西ノ原遺跡 91号住居跡 出土土器 2 (1/4)

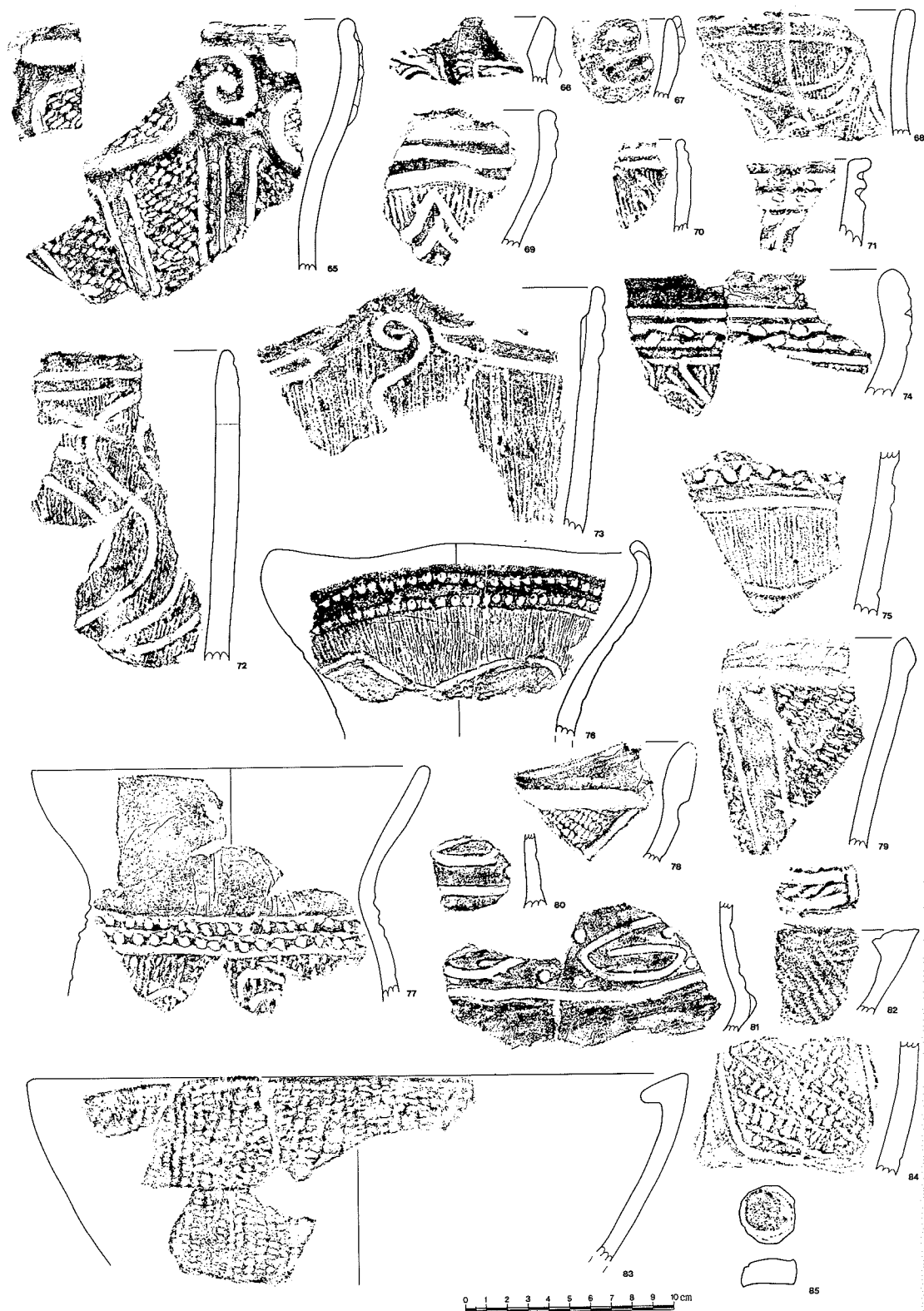


第28図 西ノ原遺跡 91号住居跡 出土土器 3 (1/3)

B(2) 91号住居跡覆土の土器（第27～32図）覆土中から918片の土器と石器5点、土製円板1点が出土した。このうち第27図は完形または準完形に接合し得たもので、第28図は覆土下層出土で勝坂期末と加曽利EⅠ古式を主体とし、若干の異系統土器を含む。第29～32図は覆土中の固くしまった面に接する上面に集中的に出土したもの。ごく少量の加曽利EⅠ新期を含むが主体は加曽利EⅡ期のものである。この層には、浅鉢形土器が20個体を超えるので第32図にまとめた。胴部片と浅鉢を含む無文部片の大半は紙幅の関係で割愛した。第27図は接合復元した土器。2は復元口径24cm・現高14cmの中形深鉢で下層（第25図○）出土。地文は撚糸文で、口縁上部は横位に、口縁下部は斜位に、胴部は縦位に密に施文する。口縁部文様帯は、口唇部と頸部区画貼付隆帯間に、2本組貼付隆帯による渦卷文と半長楕円区画を作るもので、その一部には「十字」形を作る。並行する2本の隆帯間はナデによって地文を消すが、ごく一部には消し残りがあつた。頸部無文帯と胴部懸垂文は作られない。胎土には白色微砂粒と橙色粒子が含まれている。整形は入念で口縁部内側は横ナデ仕上整形をしている。焼成良好で赤～暗褐色を呈する。器形・文様の特徴は、加曽利EⅠ古式であることを示す。3は口唇端部を欠く復元準完形の小形浅鉢であり、すべて覆土下層（第25図☆）である。胴最大径22cm・現高10cm。ほぼ直立する口唇部に続く口縁部文様帯は、渦卷文と長三角区画・長方形区画からなり、渦卷文に連なる端部が突出する。区画文・渦卷文ともに棒状工具による沈（凹）線文で縁取る。口縁下部からの刻目状えぐり取り凹線文が特徴的である。胎土に橙色粒子・白色微砂粒を含み、器表面のみでなく内面も入念な横ナデ整形がされている。焼成も良好で黒斑部を除いて赤褐色を呈する。勝坂期最末ころの浅鉢であろう。4は椀形土器で、わずかに波状を呈し、波頭は4単位で、口唇部上面の波頭間には棒状工具に凹線が描かれる。口径16cm、器高10cm、底径7cm。体部は無文。胎土には橙色粒子を含み焼成良好で、明褐色を呈する。煮沸痕跡は無い。住居覆土下層・中層出土（第25図△）。5は復元口径36cmの口縁がラッパ状に開く深鉢である。口縁部は無文であり、口縁部と胴部の境は貼付隆帯で表現する。胴部は上部3cm弱を残すのみであるが、貼付隆帯2本組の直下懸垂文と蛇行懸垂文6単位を描出したと復元できる。懸垂文間には斜位に、左上がり・右上がりの沈線を左右に配し綾杉文をつくる。施文はすべて棒状工具によるもの。胎土には大量の橙色粒子・貝粉・白色微砂粒を含み、焼成良好、赤褐色～明褐色を呈する。覆土中層（第25図●）出土。懸垂文の特徴から加曽利EⅠ新（E2）として良いと思われる。6は口径24cm、現存高27cmの深鉢で覆土中層（第25図★）出土。口縁部文様は渦卷文と半円・長方形区画四単位からなり、区画内には棒状工具による縦位の沈線を施す。頸部無文帯はなく直ちに胴部に移る。胴部の地文はLRの縄文で、貼付隆帯による蛇行懸垂文と2本組の直下懸垂文四単位をつくる。隆帯による懸垂文と口縁部と胴区分隆帯の特徴は加曽利EⅠ期に近い。7は口径35.6cm・現高18.5cmの深鉢であり覆土中層（第25図▲）出土で、口縁部から胴上部までを完形に接合し得た。地文は櫛状工具による縦位の条線文で、器表全面に施文する。口唇直下に2条の沈線をめぐらし、その下方には4本組の棒状工具で連弧文を描出するが、波状連続でなく弧単位の施文である。口縁部と胴部の境に3条の沈線文をめぐらし、ここから胴



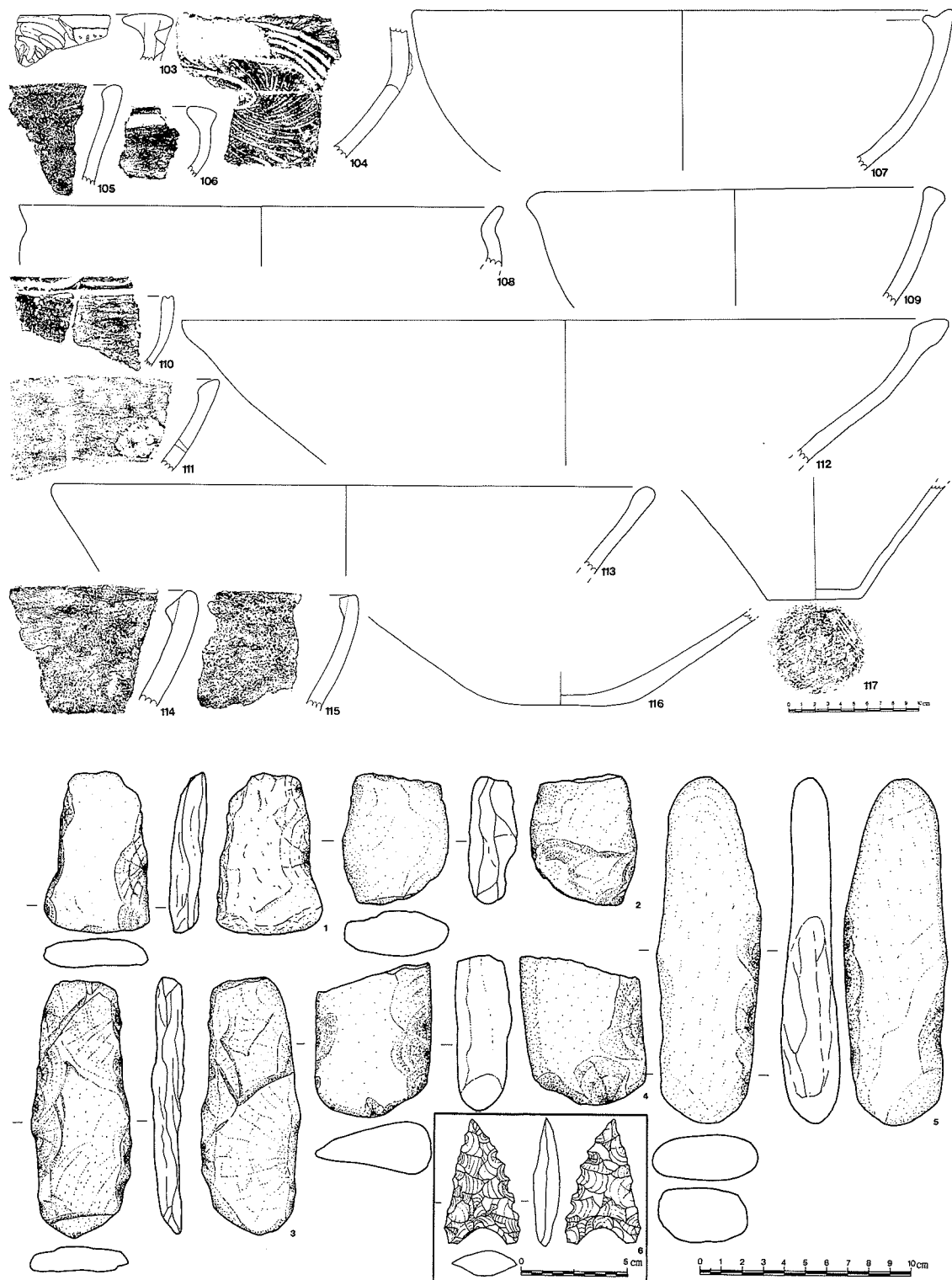
第29図 西ノ原遺跡 91号住居跡 出土土器4 (1/3)



第30図 西ノ原遺跡 91号住居跡 出土土器 5 (1/3)



第31図 西ノ原遺跡 91号住居跡 出土土器 6 (1/4)



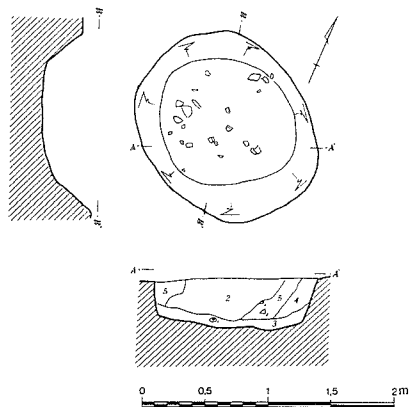
第32図 西ノ原遺跡 91号住居跡 出土土器 7 (1/5) ・出土石器 (1/3) ・石礫 (2/3)

部に2本組の沈線懸垂文を4単位描く。この他この中間にも懸垂文を描出する個所がある。胴上部径20cm。胎土には白色細砂粒のほか大量の橙色粒子を含む。器内面は口縁・胴上部ともに横ナデ整形する。焼成良好で表面暗褐色、内面明褐色を呈する。加曽利EⅡ(E3)期の典型的な連弧文深鉢である。6は口径31cmのキャリバー型深鉢であり、覆土中層出土(第25図■)であり、接合によって口縁部から底部近くの胴下半部までをほぼ完形に復原出来た。現高34cm。口縁部文様帯は渦卷文と丸み長三角形区画2単位からなっている。貼付区画隆帯の基部は沈線で縁取られており、渦卷文は角状区画内に描かれ、渦卷文は左巻き・右巻きを交互に配し2単位であり、区画内には地文のLR縄文が残る。口縁部下の区画隆帯から胴部文様帯に移る。胴部は地文LR縄文を施したうえに、棒状工具による2本の直下沈線間を磨消した懸垂文12単位(不揃い)を施す。胎土には橙色粒子を多量に含み、口縁部内側は横ナデ整形する。焼成良好で暗褐色を呈する。加曽利EⅡ期。

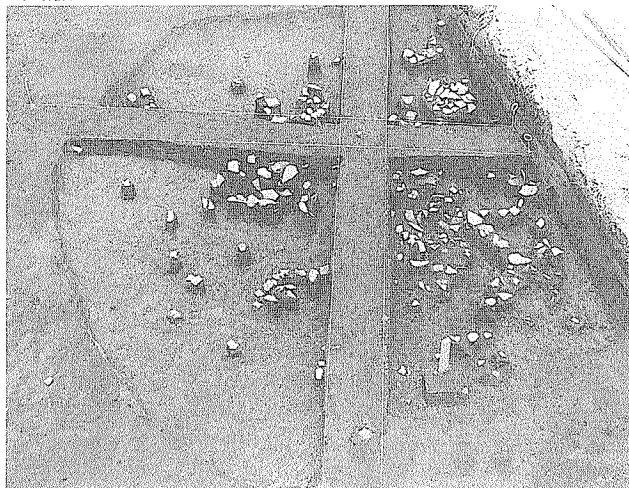
10は条痕文土器の口縁部で、隆帯の区画に集合沈線を充填して幾何学文をつくり、裏面に横位の条痕文を施し胎土に植物繊維を含む野鳥式土器。11~22は勝坂式末期で23~31はこれに共伴又は後続する地文に撚糸をもつ類である。34・35は渦卷文・区画文を口縁部文様帯とする部類の内、口縁部の地文が横位の撚糸文となるもので加曽利EⅠ古式で、36~48はこれに後続するもの。53~61は棒状工具による太い沈線文をもつ。65~86は加曽利EⅡ式に併行するもので76のように地文条線で連弧文をもつ図外の破片も多い。86は第25図□でキャリバー形深鉢で口縁部刺突文をもつ部分とその部を欠く口縁をもつこと、胴下半にまで連弧文を描くことに特徴がある。88は(第25図★)は縦位弧文をもつ。70~72は太い沈線文を地文、頸部には横位の貼付波状文をもち懸垂文は蛇行貼付文のみの類。93~98は胴部全面に烈点文を配して地文とし、唐草沈線文を加える。100・101は加曽利EⅢ。103~117は浅鉢で103と104は異系統土器。

C 6号土坑(第33図)

本土坑は第42地点として調査した県道部分の拡幅区域から確認された住居跡群より集落内部に構築された土坑群のうちの一つで、たまたま調査原因に起因し今回の第57地点として報告するため、土坑Noは継続数字で記載。(平面形)長径150cm×短径130cmの楕円形。確認面からの深さ35cm。(底径)長径110cm×短径100cm。(覆土)2しまり強い褐色土。3ローム多く含む茶褐色土。4茶褐色土。5土器片を含む褐色土。ローム含む。(遺物)覆土中層を中心に23点出土。うち3点は礫。紙数の関係で遺物は図示できないことを了解いただきたい。1995年3月に刊行予定の区画整理の報告書にゆずりたい。(坪田幹男)



第33図 西ノ原遺跡第57地点 6号土坑(1/60)



91号住居跡遺物出土状態（南より）



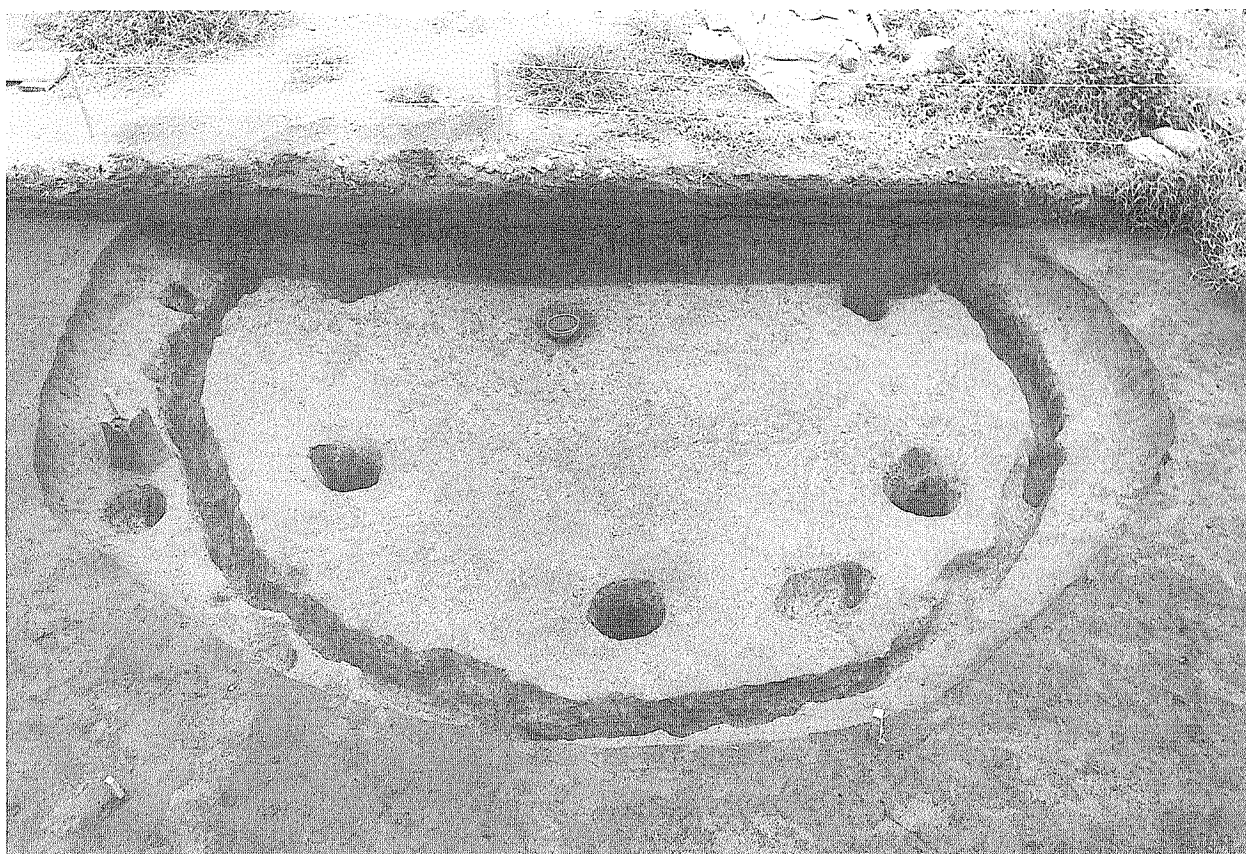
同住居跡（南より）



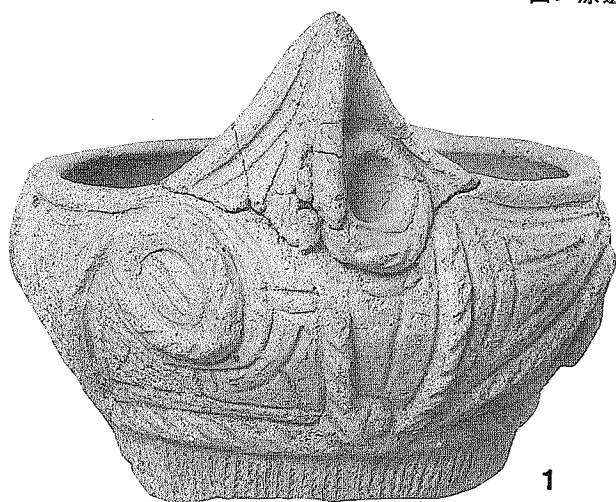
同住居跡炉体土器（南より）



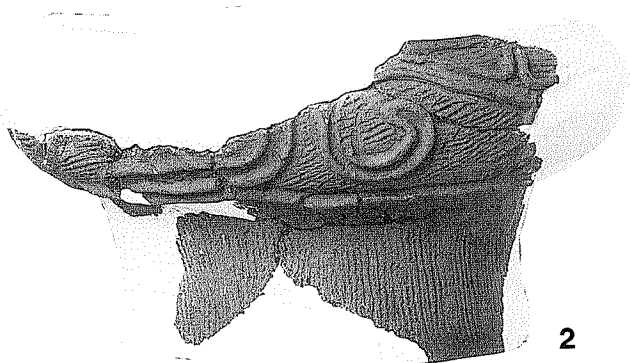
同左（西より）



同住居跡（西より）



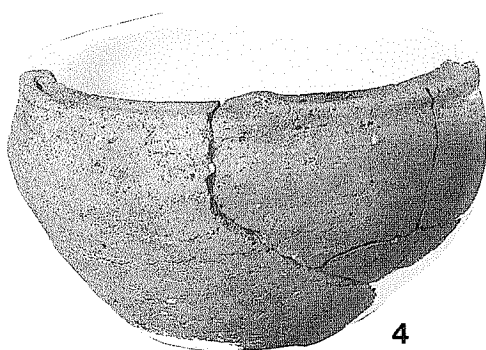
1



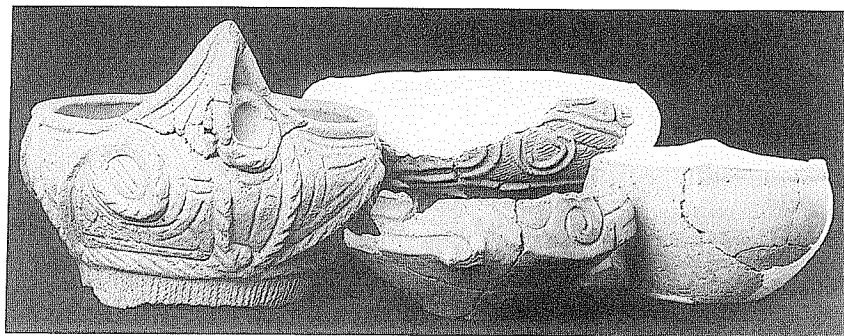
2



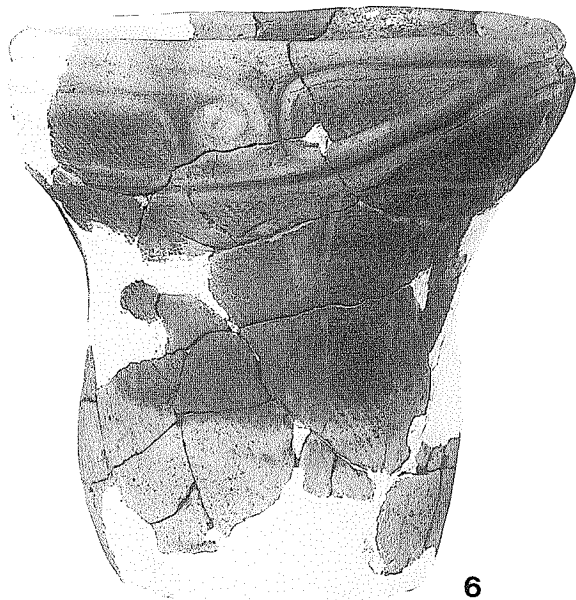
3



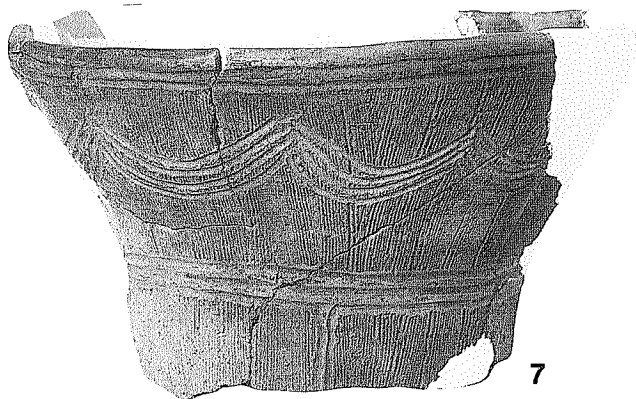
4



住居跡内覆土下層出土土器セット



6



7